『フッサール研究』第 15 号（2018）78-106

「知覚の哲学」は知覚経験の本性に迫れるか？

—小草泰氏と葛谷潤氏への応答—[1]

染谷　昌義[2]
（高千穂大学）

１．はじめに　消えない違和感　何かが違う・・・

知覚の哲学に関する専門書籍や論文集がここ 10 年の間に多数刊行され、研究の賑わいを見せている。それはそれで喜ばしい（論文生産できそうという研究者の生存をかけた少し卑しい闘争なる意味でも喜ばしい）。しかしその一方で、私には知覚の哲学が相手にしている知覚経験の本性なるもの—知覚経験とはいかなる経験であるのか、「知覚経験全体の説明（小草氏の言葉を借りる）」なるもの—が、どうにも知覚経験の本性に接近できているようには思えない。むしろ知覚経験の本性からはますます遠ざかるのではないかと心配になるのである。これが、小草氏、葛谷氏から寄せられた私への、そしてエコロジカル・アプローチへの疑問と批判への率直な感想である。けれども、誤解しないでいただきたい。それは小草氏、葛谷氏への不満では断じてない。知覚の哲学の現代的潮流への私の不満と違和感だからだ。その意

1. 本稿は、近年の知覚の哲学の議論に精通している小草泰氏、フッサール的な知識の正当化論をダメット的検証主義によってブラッシュアップしようと試みる葛谷潤氏により、染谷（2017a）に寄せられた批判と疑問に対する応答である。もともとこの応答は、2017 年 3 月 25 日に開催されたフッサール研究会でのシンポジウム「知覚は誤らないのか—エコロジカル・アプローチをめぐって」での議論がもとになっている。手厳しくもフレッシュな問題提起をしていただいた小草氏と葛谷氏に、この場を借りて心から感謝申し上げたい。ありがとうございます。またシンポジウムの企画運営をしていただいたフッサール研究会世話人の方々、また特に連絡や原稿作業をサポートいただいた松井隆明さん、鈴木崇志さんに、そしてシンポジウムに辛抱強くおつきあいいただいた聴講者の方に、記して感謝申し上げる。
2. 高千穂大学人間科学部　someyate@takachiho.ac.jp

味では、私の好みも多分に含まれ、現代の分析哲学系の知覚の哲学に私があまり魅力を感じないというただのつぶやきでしかない。けれども、単なる好みの問題として片づけられるとも思えない。小草氏、葛谷氏からの疑問と批判に応える前に、まずこの点を述べることから、論をスタートさせてみたい。

１．１　一見したところ奇妙な疑問。しかし・・・

問題の解決や解消よりも、一体何が問題であり、どのような問いかけを発するかが、ある事象を分析するときに極めて重要であることは哲学に足を突っ込んだことのある者なら誰もが認めることであろう。いかなる問題を提起するかによって、取り扱う事象の現れ方が灰とダイヤモンドのように段違いに姿を変えてしまうのである。いま、そのような問題の一例を、知覚経験について取り出してみよう。小草氏、葛谷氏、それから、現代の知覚の哲学者は、次のような問題を、知覚の哲学が真剣に取り組むにあたいする価値ある問題だと果たして思うだろうか。私にとっては、血湧き肉躍り、哲学的に知覚経験の本性を考えるとてつもなく重要な問いかけである。これらの疑問は、一見、素朴で奇異でなかなか思いつくのも難しいが、この問いかけにより知覚経験のある共通した重要な本性の一つがクローズアップされてくる。

１）なぜ、対象物を感覚器官の上に直に置いて接触させても、その対象物が何であるかも、その対象物のもつ性質も知覚できないのだろうか？たとえば、なぜ、眼球の上に玉子を置いても、玉子は見えないのだろうか？玉子の殻の白さは見えないのだろうか？なぜ、皮膚に十円玉を押しつけても、十円玉の形を感じ取ることはできないのだろうか？（皮膚と十円玉との間に隙間を作らず、押しつけることがポイントである。皮膚上で十円玉を動かしてはいけない）

２）太陽光の下で一軒の家を眺めているとき、なぜ家は見えるのに、太陽は見えないのだろうか。家の形は見えるが、太陽の形は見えないのだろうか。LED 室内灯で照らされた部屋のなかで、なぜコーヒーカップの飲み口の丸い形は見ることができるのに、室内灯の丸い形は見ることができないのだろうか？

１）の疑問はアリストテレスが、２）はマイノングが、そしてマイノングのもとでまさにこの問題の解決を企図して博士論文を書いたフリッツ・ハイダーが提起し

た問題である[3]。どうだろう。これらの問題が、知覚経験全体の説明のために極めて重要な問いかけだと思えるだろうか。私にとっては、これらの問題は、「知覚経験の現象的性格とは何か」や「知覚経験に意識的気づきがあるのかないのか」や「知覚経験の内容を構成するのは実在の特殊的性質なのか、一般的種的性質なのか」といった問題よりも、はるかに重要に思われるのである。

まず１）である。アリストテレスは、私たちが何かを知覚することができるためには、感覚器官と知覚されるべきもの（アリストテレスの言い方だと「感覚されうるもの」）との間に「中間の媒体」が必要不可欠であると主張した。アリストテレスによれば、感覚器官の上に感覚されうるものを直に置いてみても、色も音も匂いも味も、固さや柔らかさも熱いも冷たいも私たちは感覚・知覚できない[4]。「たとえば、眼の上に白い物体を直接置いたとしても白い物体を感覚することはできない」（DeA. 423b22）。眼や耳や鼻や舌や手のひらといった感覚器官と、知覚される対象物との間を埋める媒体が必ずなければならない。知覚経験の成立には、知覚対象、知覚主体（感覚器官）、そしてその間を埋める中間媒体が必ず必要であるというわけである。

視覚や聴覚や嗅覚であれば中間媒体は、空気や水である。対象物を見るためには、眼と見える対象との間に、空気（アリストテレスの言葉では「透明なもの」）がなければならない。味覚の場合は食べ物と直に接しているし、触覚の場合はモノに直に接しているではないかという反論が当然考えられるけれど、この場合でも中間媒体はやはりある。アリストテレスの考えでは、舌と食べ物との間には水（唾液）が中間媒体になっており、また触覚の場合には「肉」が中間媒体になっている（DeA. 423a22-b26）[5]。

3. DeA. 419a25-30, 423b19-22, 429a4-19, 433b19-22. Aristotle, *De Anima* からの引用や参照箇所表示は、DeA という略記を用い、その後に、慣例にならってベッカー版の指定箇所を指示する記号を用いる。また邦訳は岩波版『アリストテレス全集 第 7 巻』中畑正志訳を用いた。Meinong（1906）, Heider（1926/1959）; Heider（1988）.

4. アリストテレスにとって「感覚されうるもの」、すなわち知覚されるもの・知覚される対象とは、それぞれの感覚に固有な感覚モダリティ（視覚なら色、聴覚なら音、嗅覚なら匂い）に限定されるので、アリストテレスの議論をモダリティにまたがる知覚経験の対象の話にまで拡張するにはもう少し詳しい補足説明が必要である。だが、いまはそれを無視する。ここでは中間媒体の存在が知覚経験成立の必須条件であるということさえ理解できればよい。

5. 触覚において肉が、視覚における空気のように中間媒体になっているという考え方は、なかなか納得しがたい見方である（アリストテレス研究者の間でも問題概念だと見られているようだ　cf. Shields, 2016, 232; 245.）。しかし、近年、構造物の力学的研究から提出された設計原理であるテンセグリティというアイディアをもとに、触覚における身体媒体説が浮上し、アリストテレスの肉媒体説は完全復活した！詳しくは、野中（2016）や染谷ほか（印刷中）を参照。

この一見したところ素朴な事実は、現代の知覚の哲学者の視点からはおそらく知覚経験の本性を規定するようには思われないだろう。けれどもそれは、アリストテレスやアリストテレス的知覚観を引き継いだ一部の中世の哲学者には重要だった。アリストテレスの知覚論では、感覚する・知覚するとは、外界にあるモノたちからの働きかけ・作用を感覚器官で受け取る・受容することとされる。「感覚とは、感覚されうる形相をその素材（質料）を伴わずに受け入れうるものであり、それはたとえば封蝋が指輪の印型を指輪の素材である鉄や金を伴わずに受け入れることにたとえられる」（DeA. 424a19-20）。「感覚器官は、感覚されうるものをその素材を伴わずに受容する」（DeA. 425b26）。したがって、たとえば私たちがリンゴの赤色を見ることは、私たちの眼がリンゴから赤色の形相を受け取ることで成立すると考えられた。「質料を伴わず」とは、眼の素材がリンゴに変貌することなく、眼は眼自身の素材を保ったままという意味である[6]。リンゴの赤色はリンゴ素材と切り離すことができないが、リンゴでは質料と一緒である赤形相は、光に満たされて透明になった中間媒体に作用を及ぼしてそれを動かし、中間媒体の変動が眼をさらに動かし、そして感覚器官に生じる変化によって赤が見えるという知覚が成立するのである。

「質料を伴わない形相受容」という、アリストテレスにとっての知覚経験の本性は、感覚器官に直に対象物を接触させても対象物やその性質を知覚できないという私たちの知覚経験の事実と本質的に結びついていた。中間媒体は、感覚器官に対象物の形相（「何であるか」）をインフォームする（in-form 形相を伝える）。しかも中間媒体は、対象物とは異なり、形相を伝えはするが対象物と同じ質料にはならない（質料化しない）。対象物とは異なる性質をもちながら知覚対象の形相だけの受け取りを可能にしているのが、まさに中間媒体なのである。明るく照らされた空気は色形相を眼に、壁や囲いといった遮蔽物のない空気に満ちた広がりは音形相を耳に、口の中の唾液は味の形相を舌に、中程度の温度を保つ肉は寒暖の形相を肉内部の触覚器官に、伝える。

２）は、いわゆる知覚の因果説への疑問としてマイノングが主張したと言われているもので、マイノングのパズルと呼ばれる（Heider, 1988, 33-36）。外界の対象物が認識されるのは諸感覚の原因を推論した結果であることを認めるとしても、眼に入る光刺激の因果連鎖にはより近い原因、より遠い原因があり、どうして最初の原因である光源を推論してそれが知覚の対象とならないのか、という疑問である。たしかに知覚経験がその経験の原因を推論する過程だとすれば、視覚なら眼にはいる光線を作った原因である光源を推論しそれを見てもよいはずなのに私たちの知覚経験

6. ここには実はいくつかの解釈が存在するが、ここでは議論に深入りしない。

はそのようになっていない。太陽光の下で家を見るとき、太陽の形が丸かろうで四角であろうが、太陽の形は見えている家の形に影響をしない。しかし、家の窓が丸いか四角いかは、見えていることに影響する。これはどうしてなのだろうか。

そこでハイダーは、事物（対象物）と、事物についての情報を感覚器官に伝達する媒質（Medium）という二つの異なる存在を導入した[7]。これら二つの存在のそれぞれに固有の性質の違いが、原因を推論する知覚過程のパズルを解く鍵となるとハイダーは考えた。たとえば、屋外で石が見えるとき、太陽が発した光線が石に反射し、媒質（空気）を通って眼に届くという事態が生じている。このとき、眼に届いた光線群は、対象物である石に協調している（coordinate）。そのため、石の表面に変化が生じると眼に届く光線群もそれに依存して変化する。ところが、この光線群は媒質には協調しない。石の表面で反射した光線群のもつ性質は、石の組成や表面の状態といった石の性質のみに依存し、石の性質が変わればそれに相関して変化するのに対し、媒質自身のもつ性質によって変化させられることはない。したがって、眼に届く光線群の性質は、石の表面で起こる出来事だけに依存して決まり、眼と石との間にある媒質（空気）に影響されない、そうハイダーは論じた（Heider, 1926, 4-5）。ハイダーは私たちの見ることを可能にする、事物・空気・光源の事実を理論化したのである。ただし、ハイダーは、媒質は石表面がどのようであるかの情報を媒介するが運んではいないと考えたため、眼に届く光線群からそれが依存する原因を産出する内的過程が知覚経験の成立のために必要だという知覚論を採用している。師であるマイノングの「産出過程論」には忠実だったらしい。

１．２　知覚経験の本性を考察するためのエコロジカルターン

１）と２）の問題は、知覚経験の本性を考える上での共通点がある。それは、知覚される環境に整っている、こう言ってよければ物理的条件がどうであるかを答えとして要請する問いかけであるという点だ。ハイダーの言葉を借りれば、「事物と媒質との違いは、それ自身、まったく物理的環境の問題ではあるが、知覚にとっては極めて重要であり、感覚とも独立した問題である」（Heider, 1988, 35）。実は、１）と２）の問いの間にはおよそ 2000 年の開きがあり、知覚経験の本性を問う歴史のなかでは、この種の問いかけは長い間まともに問われてこなかった。知覚を語る上で中間媒体や媒質は長いあいだ何の価値も与えられなかったのだ。実際に、19 世紀のミュラーの特殊神経エネルギー仮説やヘルムホルツの無意識的推論説は、それぞれの

7. ハイダーについては、柴田（2012）、Heft（2001）を参考にした。

感覚神経の興奮だけの性質から、その興奮を引き起こした外界の原因をどのようにして特定できるのかをめぐって思考を展開した説である。感覚器官にじかに置いた事物であろうと、感覚神経に興奮を引き起こし、視覚には視覚に固有な、聴覚なら聴覚に固有な感覚質をもたらす。私たちの入手できるのは感覚神経の興奮と、その固有の質だけであるにもかかわらず、ここからどうして外界の色が見え、音が聞こえるのか。眼の上に白いものを置いても、視神経の興奮とその質から白さを感覚できる可能性はあると言わんばかりで、アリストテレスとは真逆の問がここでは発せられている。

「ミュラーによれば、神は、われわれの神経系がそれ自身の状態を感じたときに、外界についても何らかのことを学べるような知識を神経系に授けたのである」（Reed, 2000, 138）し、ヘルムホルツによれば、音響や光エネルギーによる感覚神経の興奮から得られる原子的感覚要素を、無意識的に統合したり変容したりして、外界の対象物の知覚は成立するとされた（Reed, 前掲載書, 171-172）。中間媒体や媒質を問題視する余地はまったくない。知覚経験全体の説明は、与えられた感覚神経の興奮、そして興奮の結果である原子的な感覚からどうやって知覚経験を構成・復元するか、そのカラクリに絞られ、知覚経験の本性は神経系の活動にのみ探られることになったのである（こうした思考のスキームが設定されていた時代に、ハイダーや現象学が登場するのは実に興味深い！）。

もう一度、１）と２）の問題に戻ってみよう。どうして私の視覚経験は、目の位置から透明な隙間を挟んであちら側にあるものを見るようになっているのか、という問題である。なぜ対象物は中間媒体・媒質をとおして見える・現れるのだろうか。脳がこの景色を作り出しているだろうか。だとしたら、なぜ脳は、別の風景ではなくこの景色を作り出しているのだろうか。眼の上にモノを直に乗せたときにはどうしてモノもその性質も見えないし現れないのだろうか。脳がモノの性質の現れを作り出してくれたってよいではないか。眼に入る光刺激を作り出した最初の原因である光源はどうして見えないし現れないのだろうか。

これらの問いに真に答えるために、アリストテレスもハイダーも生物を取り巻く環境がどのようであるか、知覚されるべき環境の構造はどうなっているか、その構造のなかを光や音や匂いなどがどう満たしているのかを真剣に思考した。しかも、その思考は、知覚経験とは何かという本性を問うことと切っても切り離せなかった。こうした思考方針の先には、知覚経験の生態学の展開が準備されている。中間媒体・媒質は、見えること現れることの特徴であるだけではない。私たち動物がそのなかを動き回ることを可能にする隙間、空間でもある。１）と２）の問題のさらに先に

は、中間媒体・媒質があることで知覚者と対象物との間に適度な距離・奥行きができ、動きながらの知覚が可能になるという見方が見え始める。

先に私は、「内容」「現象的性格」「意識されているかいなか」といった現代の知覚の哲学の考察フレームによって、知覚経験全体の説明や知覚経験の本性はうまく接近できないのではないかという不満を述べた。その理由は、１）や２）のような問いがまずもって問われることがないからである。環境に包囲され、ある場所である物理的条件のもとで、初めて可能になるという知覚経験の本性が看過されてしまうからである。たしかに、知覚経験には現象的性格がある。そしてそれは内容には汲みつくせない主観的成分を含んでいるのかもしれない。そうした「哲学的」問題を議論することは有意義かもしれない。けれどもこのフレームでは、脳や神経の話をたくさんする割には、中間媒体・媒質が議論の俎上に載せられることはまずない。中間媒体・媒質が、知覚経験を成り立たせる本質的条件であるとは思われていないからだ。そう思えないのは、知覚経験の本性へ接近する態度がそもそも異なるからだ。

私の関心は、知覚経験の「生態学」にあり、したがって知覚経験の本性は「生態学的」に特徴づけられるものである。中間媒体・媒質はこうした特徴づけの一例である。仮に「内容」「現象的性格」「意識」という知覚経験の特徴についても同様の考察を加えるとすれば、知覚経験の「生態」のなかでそれらがどのような役割を果たしているかを考えることで答えを導くことになると予想できる。

さて、知覚経験の本性に迫るには、媒質と、内容や現象的性格や意識とで、どちらについて哲学することの方が価値があるだろうか。このあたりにある好み（？）の違いが、私と小草氏や葛谷氏との間にある溝となっていると邪推する。だいぶ前置きが長くなってしまったようだ。小草氏と葛谷氏から寄せられた疑義への応答を始めることにしよう。

２．情報ピックアップをめぐる疑義

２．１ 情報ピックアップとはどのような活動か

小草、葛谷両氏とも、情報ピックアップ（information pick-up）とは何か、という点で疑問を呈している。たしかに知覚が情報を拾い上げる活動であると言われても、感覚器官に入力される近刺激にもとづいて周囲世界の認知を成立させる過程を知覚とするパラダイムに縛りつけられていると、理解に苦しむ概念である。ギブソンの言葉も借りながら、解説してみたい。

まず、環境の事実を法則的に特定するエコロジカル情報が媒質内に存在することは前提とする[8]。環境の事実に「ついて性（aboutness）」をもったエコロジカル情報は、知覚者の周囲に存在する。エコロジカル情報は、近刺激から知覚者が作り上げるものではない。この情報概念を使って、知覚とは、情報を探し出しピックアップする活動である、という知覚の新定義が提示される。知覚者は、環境の事実を知覚するために、情報を探索し、それを見つけ出し、拾い上げ（ピックアップ）ればよい。そしてこの拾い上げ活動を作り上げている知覚者の身体運動も情報ピックアップ活動である。

『生態学的知覚システム』（Gibson, 1966）のなかで情報ピックアップの分析としてギブソンが提示しているスキャニング（走査）を例にして、情報ピックアップで何が行われているのかを眺めてみよう。ギブソンは、こんな例を用いる。わたしたちは、たとえば家を見るとき、常に家全体を一望のもとに見渡せるような位置から見るわけではない。門、ドア、玄関、廊下、部屋、外塀……といった家の部分部分を継時的に視野に収めながら見る。門を視野に収めたら、二階は見えないし、二階を見上げたら、玄関は見えなくなる。このような包囲光の配列の部分部分を次々に視野に収めること（環境の異なる部分を継時的に次々に見ること）は、スキャニングと呼ばれる（Gibson, 1966, 250, 邦訳 287 頁）。スキャニングは、ギブソンが執拗に反対する「感覚に基づく知覚論」では、難しい問題を引き起こす。部分部分のスナップショット（感覚）がどのように統合されて、一つの家というシーンの知覚になるのかという問題である。

心理学慣れしている人は、ここで、スナップショットの記憶を保持し、脳が感覚データの系列（記憶）から同時的な合成物を構成すればよい、とおそらく思うはずだ。同じ対象物から様々な刺激が継時的にやってきて感覚が次々に継起するが、それらを統合して一つの対象物の姿にまとめ上げたり、あるいは顔を背けたり眼を閉じたりして感覚を一時中断したときには記憶が感覚の役目を引き受けて知覚へと統合される素材を提供し続けたり、といった過程を想定するのである。けれども、ギブソンはこの考え方に反対する。エコロジカル情報が存在するなら、このような過程なしでも説明できるからである。

8. 私から告白するのも問題だが、エコロジカル・アプローチにとっての最大の強みであると同時にアキレス腱になるのは、実はエコロジカル情報の存在である。小草氏も葛谷氏もこの点には疑問を挟んでいなかったのでホッと一安心、胸をなでおろした。それどころか、葛谷氏はドレツキの情報認識論を援用してかなり肯定的に扱ってくれている。なお、エコロジカル情報の存在に疑問を突きつけて、このアプローチへの最もストレートで力強い批判をしたのは、私の知るところ Foder & Pylyshyn（1981）だけである（cf. ibid., pp.143-144）。

視覚的スキャニングの注目すべき事実は、一時的な網膜印象が連続して起っているという意識が知覚の経験にはまったく欠けていることである。少なくともヒトの視覚では、世界内の対象物や、絵の各部分を順に注視しているのが事実だとしても、世界の全対象物や絵の全部分が同時に存在するという意識がある。順に見ていたのに、現象的には物理的な配列全体が共存しているように見えるのである。配列のなかの対象物の数を数えるのは簡単にできるが、眼が何回注視したのかを数えることはこれまで誰もできなかった。この悩ましい問題に対し、知覚を網膜印象から解き明かす理論は、網膜上の動きは内的に相殺されるとか、網膜印象が無意識的につなぎ合わされるとか、手の込んだ説明をしてきた。けれども、これは、継起的なサンプリングが同時的な把握と等しくなるケースとして説明できるかもしれないのだ。（Gibson, 1966, 252, 邦訳 290 頁。下線強調は引用者による。）

＜エコロジカル情報があるならば＞（この前提がとても重要）、環境の部分の継起的なサンプリングであっても、同時的に一つの対象物を知覚的に認知できる！眼に見える風景、あるいは手に触れるモノの感触は、観察点や手を動かせば次々に変化し入れ替わる。けれども、わたしたちは、一つの風景、一つの世界、一つの対象物、一つのモノを見るし、触る。ギブソンによれば、こうした「時間をかけて生じる単一の恒常的対象の知覚、単一の視覚世界の知覚は、入手した刺激の変化系列の背後に不変な情報が存在し、それに対して注意が向けられていることとして説明できる」（ibid., 251, 邦訳 289 頁）。情報ピックアップ活動とは、この例で言えば、見回して包囲光配列を眼でなぞりながら（スキャニングしながら）、この変化系列のなかにある不変性に注意が向くことである。知覚者を包囲するエネルギーの変化をたどりながら、そこに潜在する持続するパタン、構造へと注意が向けられ続けているとき、情報はピックアップされている。ピックアップという言い方は、モノを手で拾いあげるように一時的に達成される活動のような印象を与えるが、包囲エネルギーをたどる時間をかけた作業を継続することから成り立つ。だから後年の本では、情報ピックアップは、情報への共鳴（resonate to）とか情報へのチューニング（be attuned to）という比喩的な言い方で表現されるようになり（Gibson, 1979, 249, 邦訳 264 頁）、環境の事実に見合った仕方で環境と接触し続ける活動というニュアンスが強調されていった。

押さえるべきポイントは、包囲光配列の変化の系列中に潜在する不変なパタン（不変項、エコロジカル情報）に注意が向けられているとき、エコロジカル情報は拾い上げられていること、そして、このような注意が向けられるには、どれほど短くと

も一定時間を要するということだ。先の例を用いれば、一度にすべてを視野に納められない家屋であっても、その一つの家屋を特定するエコロジカル情報が媒質内に潜在している。家をあちらからこちらからと「動く」観察点から時間をかけて眺めるとき、この情報を拾い上げることができる。

２．２ 情報をピックアップするために知覚者・主体には何が必要か

ここからは小草氏と葛谷氏からの疑問に応答することにしよう。第一の疑問。情報のピックアップには知覚者の側の「理解」や「知識」のようなものは必要ないのか（小草氏）。質問の意図は、知覚者・主体の側での心的・認知的側面について多くを語らないエコロジカル・アプローチを懸念しての心遣いである（ありがたい）。もちろん情報ピックアップができるための主体に必要とされる「理解」や「知識」のようなものは、ある。それは、環境内を動き回ってエコロジカル情報を探索し発見するために必要となる体の振る舞い、身体的技能である。ラケットでボールを打ち返したり、氷の上を滑走するために一定の身体的技能が必要であるのと同じように、拾い上げたいエコロジカル情報を拾い上げるために一定の身体的技能が必要である。もちろん、振る舞いの技能がどういった類の「理解」や「知識」であるかは別途考察が必要であるが、知覚者・主体の側にそういったものがまるでないとまで乱暴には考えていない。そこには当然個体差もある。知覚システムには学習性もある（染谷, 2017a, 83-83）。

２．３ 情報ピックアップの定式化から見えてくる不備

葛谷氏からは、情報ピックアップは、知覚システムの調整活動なのか、それとも知覚システムの活動によって可能になる別の活動なのかという問いかけがなされた。これらは概念的に区別されるべき事象であるにもかかわらず、私の「情報ピックアップ」という言葉の使い方にアンビギュイティがあると指摘された。掃除機がゴミを吸い込むことと、その掃除機をトイレや風呂場に連れていく「調整」とは区別すべきであるというわけだ。それでも葛谷氏は、「知覚者の活動にあたるものに関しては、「（知覚システムが情報をピックアップするための）知覚システムの調整活動」」と解し、知覚システム（身体）が行う活動＝情報ピックアップ＝システムの調整活動だと理解していただけた。

ただし気になる点がある。掃除機の例でもそうだが、「ゴミを吸い取る」活動が、掃除機を調整する活動（たとえば掃除機をいろいろな場所に動かす操作）なのか、

それとも掃除機自身の活動なのか、という疑問が、知覚-行為を行う身体では有意味に問えるかどうかという点である。葛谷氏は、注 4 で触れているように、身体の振る舞いのおかげで情報ピックアップが成立すると考えることに異議はないようだが、情報ピックアップが身体の振る舞いである（知覚システムの活動である）とは考えていないようなのである。知覚システムは、感覚性と運動性の区別のない、エコロジカル情報をピックアップするシステムである。すでに述べたように、ピックアップとは、情報に「注意が向いている」こと、情報に「共鳴している」ことだ。注意や共鳴は感受の側面を強調している概念だが、ここに運動性もあることは銘記してもよい。身体の振る舞い・運動の「おかげで」情報ピックアップが可能になるのではなく、身体の振る舞い「が」情報ピックアップなのである[9]。人は見るために動き、動きながら見る。知覚と行動は循環する。

葛谷氏は情報ピックアップの定式化をしている（ありがたい）。その最初の定式化では、情報ピックアップが成立しているとき、生物のシステム状態と環境の事実との相関性があるだけでそれを「知覚」としてしまっているため、知覚者である生物の認知的側面がくみとられていないとの批判がなされる。これは実に真っ当な批判である。

たとえば、紫外線から体を防御する私たちの日焼けシステムが働いて、私たちの皮膚が茶色になることと夏の強い日差しとの間には相関性・特定性がある。しかしこの日焼けシステムが、夏の日差しの情報をピックアップして、夏の日差しを「知覚」しているとは考えられない。さらに、日焼けシステムの日差し情報ピックアップは、日差しを避ける行動を産出することへと結びついてもいない。したがって、日差し情報のピックアップは、日差しが強いという環境の事実を利用できていない（この事態は、他人や自分の日焼けした状態を知覚して日陰へ移動することとは異

9. 現象学的知覚論・身体論の十八番である、感覚（刺激感受）と運動との不可分性（というより一体性）、たとえば、メルロ=ポンティの次のような言葉を思い出されたい。「手に捕獲具をもって、逃げ回る動物を捕まえようとするとき、もちろん私の運動の一つ一つは外部からの刺激作用への反応であることは間違いない。しかし、私が自分の受容器を外部からの刺激作用の影響下に置こうとする運動がなければ、刺激作用が受容できないこともまた間違いない。・・・眼や耳が逃げていく動物を追跡して刺激と反応が交代しているとき、刺激と反応のどちらが最初にあったのかを述べることはできない。有機体のあらゆる運動は常に外部からの影響に条件づけられているから、行動を環境からの結果として扱うことも、お望みなら確かにできよう。だが同じようにして、有機体が受容するすべての刺激作用は、それはそれで、有機体がまず身体を動かし、その運動の結果、受容器が外的影響にさらされることによって初めて可能になったのであるから、行動がすべての刺激作用の第一の原因であると言うこともできるだろう。このようにして刺激のゲシュタルト［刺激作用の系列・布置］は有機体そのものによって、つまり有機体が自らを外界からの作用に差し出すそれぞれのやり方によって、創造されるのである。」（Merleau-Ponty, 1964 32-33.）

なることに注意されたい)。この意味での「知覚（情報ピックアップ）は、行動をガイドすることができていない。システムが単に情報を運んでいる状態に遷移したという以上のことがなければ」知覚という意味での「情報ピックアップ」（情報を運んでいる状態）にはならない。これが、葛谷氏が最初の定式化の不備をとおして私やギブソンに突きつける批判だ。

ではどうすればよいか。そこで葛谷氏は、適切な行動をガイドするというステータスを情報のピックアップに授けようとする。起源説に依拠し、情報をピックアップした状態に、その果たすべき本来の役割・機能をつけ加える戦略に出る。情報をピックアップしているというのは、単に環境の事実と法則的相関性・特定性をもった状態に、生物のシステムが遷移しただけなのではない。その状態に遷移することが、その後の生物の行動をガイドする機能を持つことに、言い換えれば、生物の行動決定システム（ミリカンは「消費者」と呼んでいた）に利用できるようになっていなければならない。「生物全体の活動・行動決定において、必要な情報を運ぶことがその「役割」であるという意味で」情報ピックアップの状態は、行動システムに「「情報提供役」として振舞うものでなければならない」。このあたりの議論は本当に丁寧で涙がでてくる。

さてしかし、以上の私の理解が正しければ、葛谷氏は、エコロジカル・アプローチの情報概念の重要なポイントを理解し損ねてもいる。葛谷氏のタームを用いて、あらためて私から情報ピックアップの定式化を以下のように提案したい。

ある生物の知覚システム x が、＜y が b である＞という情報をピップアップするとは、x に関して次の諸条件を満たす状態 a が存在するということである。

（1）プロセス：x がある特定のプロセスを通じて a に遷移した。

（2）情報：＜z が c である＞ことは＜y が b である＞という情報を運んでいる。

（3）状態：a は＜z が c である＞ に注意した・共鳴した状態である。

y：環境、b：環境の状態・性質、z：包囲エネルギー、c：包囲エネルギーの状態・性質

下線部が葛谷氏の定式化に変更を加えた部分である。葛谷氏と私の定式化との違いは、葛谷氏が情報を運んでいるのが「生物のシステムの状態 a」であると定式化したのに対し、私は情報を運んでいるのは包囲エネルギーz の状態・性質 c であるとしている点だ。エコロジカル情報は、生物が担う状態ではない。これは染谷（2017a）でも何度も指摘している。たとえば、包囲光の構造的性質と、環境を構成する表面、

その配置、表面を構成している物質の性質との間に法則的特定性（相関性）が成り立っていることは、生物の存在とはまるで関係がない。葛谷氏も年輪を用いた自然記号の話をしているときにはきちんと理解していた。しかしながら、この意味での情報をピックアップすることを定式化する際に、バイアスがかかってしまった。環境の事実を特定するエコロジカル情報を運んでいるのは、生物のシステムではなく、媒質を満たす包囲エネルギーである。生物の知覚システムは、この包囲エネルギーが或る特定の状態や性質であるときに、それに注意を向ける。それが情報をピックアップする活動である。そして、目的や機能概念を加味するとしたら、生物の知覚システムが、自身の振る舞いを制御するために、どのエコロジカル情報に注意を向けて共鳴し、どのエコロジカル情報を無視するのかというシステムの働きに求められると考えられる。

２．４ エコロジカル・アプローチは目的論的機能主義か

オシツオサレツ表象とアフォーダンス知覚との異同を考察したときにも気がついたことであるが（染谷, 2017b）、ギブソンとミリカン流の起源説に依拠する目的論的機能主義には重要な違いがある。知覚経験の本性の考察に、行動の制御やガイドを抜かすことはできないとする点は共通しているものの、行動をガイドし制御するために利用されるリソース（ギブソンであればそれは情報であり、ミリカンであれば表象状態である）の所在が、ギブソンとミリカンでは異なるのだ。ミリカンは生物自身の身体状態（アフォーダンス知覚状態、オシツオサレツ表象）を行動産出システムが利用するリソースと見ているのに対し、ギブソンは生物の身体の外部の媒質中にある情報（アフォーダンスを特定する情報）を行動制御のためのリソースと見なしている。

葛谷氏もミリカンと同様、知覚システムの状態を行動システムが利用し、生物の行動が作り出されるという図式を暗黙のうちに採用している。いみじくも、それが定式化に反映してしまっているのである。

十分に論じられないのを承知しつつ、この暗黙のバイアスに疑問を呈しておこう。知覚や行動の説明に「表象」を用いる場合、行動を作り出す生物の機構は自身の内部状態を利用する、と必ず想定される。オシツオサレツ表象では、周囲の状況を記述的に表す生物の内的状態はその状況において取るべき行動を指令する側面も兼ね備えており、表象の生産と表象の消費・利用とが分化していないとはいえ、生物は、自己外の状況をいったん自己の内部状態として写し取り、この写し取りを利用して行動を作り出す、と考えられている（たとえば、鈴木, 2015, 131-140 の本来的表象に

ついての解説を参照)。私の疑問は、どうして・なぜ、周囲の状況や特徴を直に行動調整に利用できる知覚-行為システムを想定しないのか、というものである。

説明の経済性の点からも、生物の活動の効率性からも、内部表象をなしにしてそれに代わる行動制御・行動産出のためのリソースを外界のマトリックスに求め、外界を直に利用して知覚し行動を制御できるシステムを想定するほうがベターに思える。どうして機能主義者は回り道をするのだろうか。少なくとも、エコロジカル・アプローチの知覚システムは、情報をピックアップしながら、ピックアップした情報を行動の制御に直接利用し、さらなる情報のピックアップを継続するシステムである[10]。身体は身体内部の状態に特定的な動作（機械特定的な動き）を作るのではなく、身体外部の状況に特定的な動作（ただし機能特定的な動作）を作る。外部状況の性質は、内部状態として写し取らなくとも、情報の性質として情報自身に保存できるのなら（まさにエコロジカル情報はこのことを仮定している)、行動調整にも表象を用いる必要はないのである（染谷、2017a、241-247)。

なお葛谷氏の論考の主旨は、目的論的機能主義の路線で、役割・機能を果たせていないことを知覚錯誤とし、また行動決定システムに利用される役割・機能を担った知覚システムの状態を表象状態と考えれば、エコロジカル・アプローチは現代の機能主義のなかのある種の表象概念と親和性を持つのであるから、染谷が必死に錯誤や表象を退ける議論はミスリーティングだ、というものである。

もしも表象の「ようなもの」があるとすれば、それはエコロジカル情報ということになるだろう。しかし、残念ながらエコロジカル情報の特定性には、目的論的機能主義の意味での固有機能はない。少なくとも私はそのように考えている（ギブソンはそうは考えていないようである。後述)。包囲光の特定性は、視覚能力をもつ生物に利用されることになったし、その特定性を利用できる視覚システムが進化史のなかで選択されたのだとしても、包囲光には環境の事実を特定する目的や役割があることにはならないからである。

けれどもギブソンは、誤情報（misinformation）という概念を用いて、動物を知覚錯誤へと導いてしまう情報の存在を肯定し、ガラスの見落としやカモフラージュされた落とし穴が知覚できないことを、誤情報を用いて説明しようとする（Gibson, 1979, 142-143, 邦訳 156 頁)。ギブソンは、包囲光情報が固有機能を果たせていないケースがあるという見方で知覚錯誤を、目的論的機能主義と同じ立場で捉えているのである。

10. 環境の事実を知覚的に「知る」情報ピックアップは、身体を適切に動かす振る舞いとその制御活動とも一体となっている。知覚システムの情報ピックアップ活動は、感覚と運動の側面を切り離すことができない。注 9 参照。また染谷（2017a）230-247 も参照。

私は、錯誤の説明に誤情報を導入するギブソンが間違っていると思っている（染谷, 2017a, cf. 299）。情報の特定性に限界や制約があること、したがって情報は環境の事実を時に十分に特定できないことがあること、それはあり得る。しかし、そのような限界や制約のある情報は、環境の事実を特定しない・できないのであって、環境の非事実（偽の環境）を特定しているのではない。ギブソンや目的論的機能主義のように、情報に固有機能があるとすれば、誤情報は、環境の事実でないこと、偽である環境を特定する情報であることになる。しかし、包囲エネルギー中の情報は偽の環境を特定することはできない。そもそも環境の事実でないことは環境にはありえない。信念であれば非事実を内容とすることはいくらでもできる。けれど、包囲エネルギーの構造を基礎にする情報には、このような嘘をつく力、構想力はない。錯誤は生物の側のしくじり、やり損ないであって、環境が誤っている、情報が誤っているということはない。この論点は譲らない。よって、エコロジカル・アプローチは、目的論的機能主義に全面的に吸収されはしないのである。

３．知覚経験の意識的な気づき、現象的性格を明示せよ！

小草氏からは、情報ピックアップには意識的な気づきは含まれるのか、含まれないのか、さらによりスペシフィックには、意識的に気づかれているのは、情報なのか、情報が特定する環境の事実（自己の事実[11]）なのかどっちなのだという疑問が寄せられた。ズバリ、意識的に気づかれているのは、環境の事実だと答えたい。環境の事実をわたしたちは直接知覚している。ただし情報に基づいて。

しかしそうなると、情報には気づいておらず、情報への感知やピックアップは無意識下で行われていることになるのだろうか。いや情報にも気づいているし、不変項に注意が向いている。だが、それはおかしい。意識的に気づくのは、情報か環境の事実かのどちらかであるはずだ。この疑問に対する回答は、知覚経験の特徴である「現象的性格」をどのようなものとみなすのかということにも関係する。現象的

11. エコロジカル情報は、環境の事実だけでなく、その環境のなかで或る動作をしながらいま知覚経験をしている知覚者自身の事実も特定することができる。染谷（2017a）58-69 参照。そのため、エコロジカル情報のピックアップ活動は運動制御の機能も兼ね備えている。後に知覚経験の現象的性格について論じる際に、現象的性格は「知覚者自身の状況を含んだ環境の事実からなる」のようにもってまわった言い方をするのは、情報にはこうした二重の特定性があるからである。現象的性格は環境と知覚者の両方の現出という意味をもつ。本来なら、先の葛谷氏への応答も、情報ピックアップの定式化に自己の事実の特定性も組み込んでなされなければならない。

性格を構成しているのは、環境の事実（の性質）なのか、それとも情報の事実なのか。

問題が難しくなってきた。現象学のジャーゴンで言い直して考えやすくしてみよう。知覚経験において意識的に気づかれているのは、現出なのか、それとも現出者なのか。リンゴが見えているとき、意識的に気づいているのは、リンゴの射影なのか、それともリンゴそのものなのか。知覚では対象が自体所与されていることからすれば、リンゴそのものを意識している、気づいていると言いたい。意識的な気づきを伴って知覚されるのは現出者である。しかしながら、そのとき目にしているのは、あるパースペクティヴから眺められたリンゴの射影（側面）である。すると、意識的に気づかれているのは現出である。しかし現出はセンスデータのように知覚される対象ではない。では、現出は、知覚されるのではなく面識される、現出は面識の対象であると言えばよいか。さらに疑問。知覚経験の現象的性格は、現出者の性質や状態なのか（素朴実在論？）、それとも現出の性質や状態なのか（表象された知覚対象物の性質や状態なのか？それとも表象状態になっている知覚者の「リンゴを知覚しているのはどのようなことであるか」なのか？）。

小草氏から回答を求められている疑問の前で立ち止まる。ムムム…この疑問の立て方がおかしくないだろうか？小草氏に逆に問うとしよう。現出と現出者の両方に意識的に気づいていると答えてはいけないのだろうか。意識的に気づいているものは、現出か現出者のどちらか一方でなければならないのだろうか。

現象学者と現象主義者との違いは、現象学者が、現出者と現出（現れ方）とを分離せず、現出への意識的気づきをとおして現出者への意識的気づきも成立すると考える点、「意味」という言い方を使えば、現出の意味の意識的気づきをとおして意味される対象（現出者）の意識的気づきに至ると考えるところにある。現象主義者は、現出と現出者を分離し、極端に観念論的になると、後者など存在せず、一連の現出群につけられた名目としてのステータスしか現出者は持たないと考える。

リンゴの赤色は、見ている私に現れている赤であり、かつ、リンゴの赤である。現出も現出者も両方とも、意識的気づきを伴う。私に現れ出ている赤であるのだから、その赤は知覚者が今ここから見ている事実を指し示す。またリンゴの赤であるのだから、リンゴの事実（環境の事実）を指し示す。いまここから見ている私に現れている赤であることが意識されているからこそ、そのリンゴを手にとって食べようという行動が動機づけられるのだし、その赤の現れの変化に応じて行動を制御し、リンゴを手にとって食べる行動を起こせる。

エコロジカル情報をピックアップしているとき、情報は注意され共鳴されており、意識的に気づいていると言いたい。それと同時に、その情報が特定している環境の事実、そして自己の事実もまた意識的に気づいていると言いたい。情報への気づきと情報が特定することがらへの気づきが分離することはない。小草氏や小草氏の依拠する知覚の哲学者たちには、このように返答したい。もしもこの回答に満足できないのであれば、逆に意識的気づきの向けられる相手が情報か対象かのどちらか一方でなければならないのは何故なのかその理由を教えていただき、私の無知と迷妄を開いていただきたい。

小草氏からの疑問である知覚経験の現象的性格は何からなるものなのかへの疑問も同じように答えたい。エコロジカル情報が現象的性格を担うのか、エコロジカル情報が特定する環境の事実と自己の事実が現象的性格を担うのか、どちらなのか。アフォーダンスは、環境と自己の事実（性質）であって、エコロジカル情報の事実（性質）ではない。したがって、アフォーダンスが見え、知覚されるとき、アフォーダンスを特定する情報は、＜いまここから見ている私がこれから行うことのできる行動の機会としての環境の事実＞を特定している限りは、アフォーダンス知覚経験の現象的性格は、知覚者の状況をも巻き込んではいるが、環境の事実からなる。しかし同時に、エコロジカル情報もピックアップされ意識的に気づかれており、とりわけ知覚しながら行動を制御する状況では、あのエコロジカル情報ではなくこのエコロジカル情報をピックアップして知覚-行為を行うのであるから、意識的に気づいている現象的性格は特定のエコロジカル情報からなるとも言える。情報の差異に気づけなければ、目的とする情報をピックアップして行動を制御することができないからである（ただし、情報がその現象的性格を持っているのではないし、アフォーダンスを持つのは情報ではない）。

これまで私は、「意識的に気づかれている」というフレーズを、言語化して判断できることを必ずしも含まない意味で用いてきたつもりである。多くの場合、私たちは言葉にはうまく表現できないエコロジカル情報の差異に意識的に気づいているし、言葉にはうまく表現できない＜エコロジカル情報が特定する環境の事実＞にも意識的に気づいている。気づいていなければ知覚も行動もできない。「意識的に気づく」という言い方を、自覚する（consciousness）や判断することとは関係なく、拡張した意味で用いることができるのであれば、エコロジカル情報が気づかれることなく無意識にピックアップされることはないと言えるだろう。知覚経験には、言語的に表現できない側面はあっても、無意識的過程などない、そう言い切ってしまってよいのかもしれない。

４．知覚錯誤をめぐって

４．１　失われたニュートラルな知覚「的経験」を求めて

小草氏は、私の知覚錯誤解消論法の結論に反対する者は、近年の知覚の哲学者のなかには誰もいないという。これが本当だとすれば、私は藁人形を相手に誰も主張していないことに五寸釘を打ちつけていたことになる。では、誤表象の可能性を表象の本質的な特徴の一つとみなし、知覚経験を表象と見なす考え方では、誤った知覚経験の余地をどうやって確保するのだろうか。小草氏によれば、知識が真であるのに対して信念は真偽未詳であるのと同様に、知覚は真正（veridical）であるのに対し真正錯誤未詳の知覚「的経験」なるものがあるという[12]。そして、このニュートラルな知覚「的経験」が、真正にも錯誤にも転び得るという意味で、知覚「的経験」は誤り得るという。

小草氏はありがたくも、錯誤解消論法を完成させるには、真正錯誤未詳の知覚「的経験」などないことを論証すべきだと私を誘っている。誘いに乗ることにしよう。議論を始める前に、小草氏もおそらく認めていただけると思うが、染谷（2017a）での議論を踏まえて、真正は成功（達成）を意味し、錯誤は失敗（し損ない、未達成）を意味すると解してもよいだろう。達成未達成が未詳の経験は、知覚と同種の現象的性格を持っているか、あるいは、知覚者には同種の現象的性格を持っていると思われており、知覚と区別できないと考えられる。小草氏から私に与えられた課題の一つは、そのような経験が「ありえない」ことの論証である。

この論証は、私には不利である。なぜなら、そのような経験がどのような経験であるかを想定するのが極めて困難であるからだ。それでもやってみよう。達成に転ぶのか失敗に転ぶのかがわからないままである経験として思い浮かべることができるのは、まだ最後までやり終えていない途上にある経験、見終わっていない経験、しかるべきエコロジカル情報をピックアップできていない途中の経験ということだろう。でもこのような経験なら当然ある。それはまだ知覚ではない。知覚成功なのか知覚失敗なのか落ち着かないけれど、情報ピックアップ活動が時間を要する活動であれば、その途上の経験なのだ。けれども、この途上経験の存在は「知覚失敗し得る経験」があることを示すだけであって、私がその存在を哲学的フィクションとして排除しようとしている知覚錯誤があることを示してはいない[13]。小草氏の言う

12. ここでは真偽性格は命題的態度に限定し、知覚経験が命題的態度ではない（このことについての論証をしていないのだが）ことを前提に、知覚「的経験」には真正錯誤性格なるもってまわった言い方をする。

13. ちなみに、知覚の達成基準は、絶対的ではなく、行動の目的や意図、そのときの状況によって変わる文脈依存的で相対的なものであることから、達成したかに見えた知覚も、ま

知覚「的経験」が、このまだ半人前の途上経験のことを指すのであれば、途上経験が失敗し得ることを述べても、私に対する批判にはならないと思われる。

では私は何を論じるべきなのだろうか。

小草氏の批判は、半ば私の強引さに向けられているように見える。たとえば、達成でありながら失敗であるような経験、しかも十分に時間をかけてエコロジカル情報の探索をさせたとしても、まだ達成でも失敗でもあるような経験などあり得ないとする私の論じ方は強すぎる[14]。センスデータ説への私の反論もセンスデータ説論者が保持したい直観（私たち非哲学者でも共感できる直観）をきちんと汲み取らずアンフェアである。ガラスを見ることができない経験やベニテングダケの有毒性を見ることができない経験さえも錯誤ではないとゴリ押しする私の論証は「そう言えば錯誤論を退けられると言う以外」の理由や根拠を持たない、自己主張を無理やり貫き通すための屁理屈でしかない（ここまで言われるとめげてくる・・・）。さらに、葛谷氏によれば、砂中の微弱電流情報をピックアップすることで食餌の存在を知覚するサメが、食餌もないのに人工的機械が発生した電流情報をピックアップして機械を食べようとしたとき、サメの知覚は誤っていないと論じるのは「控えめに言っても受け入れがたい」。

さて、これらすべてに対して応答したいのであるが、紙幅の都合もあることから、以下では、知覚の哲学における錯誤の位置づけについてだけに集中して論じることにしたい。もっとも、以下の私の主張は、自から、小草氏や葛谷氏から強引だ屁理屈だと指摘された批判の力を、跳ね返すことはできないにしても、少しは緩めることができると思う。

４．２　知覚・錯覚・幻覚

端的に言ってしまおう。問題は、知覚（成功・達成）と、現象的性格でも内容の上でも区別できない、知覚とそっくりウリふたつの、幻覚（知覚「的経験」）や錯覚（知覚「的経験」）がありえるのか、ということ、これに尽きる。屁理屈にならないために、以下の宣言をする！

だ見終えていない未達成や失敗である可能性を孕んでいる。このことは染谷（2017a）311-317にて論じた。達成基準の相対性は、知覚がそもそも情報を探索する探究的活動、ある種の行為であることから帰結する。ある意味で、知覚は落とし所としての一時的達成はあっても、いつでも途上であるとも言い得る。しかしそれは、知覚を懐疑の淵に誘い込むのではなくて、さらなる達成を目指して諦めずに情報探索を動機づけ駆動するパワーの源なのである。

14. 注 13 でも述べたが、これでもう十分という情報探索はおそらくありえず、知覚経験が「終わらない、完了しない、絶対の成功でないかもしれない」可能性を染谷（2017a）で論じている。だから正確には小草氏が指摘するほど強くは論じてはいない。

1） 議論の目的は、錯覚論法や懐疑論に反駁するためのものではなく、真正錯誤未詳な知覚「的経験」の本性、そして知覚の本性、幻覚の本性、錯覚の本性を考察することにある。この作業は、経験の形而上学であって、認識論ではない[15]。
2） 情報の十分な探索をやり終えておらず、達成に至る途上にいる知覚「的経験」、やがては幻覚や錯覚であることが判明するにしても、その途上における知覚「的経験」の現象的性格や内容を、知覚と比較することを禁じない。
3） 日常の直観や非哲学者の観点からの受け入れやすさ／受け入れ難さをきちんと考慮する。幻覚や錯覚も「見た」「聞いた」「触った」と言いたくなるし、人を見間違ったときに何かを見ていたと言いたくなる。水に入れたまっすぐな棒が曲がって見えれば「見まちがっている」と思うこともあるだろうし、透明なガラスを見ることができずにぶつかったら「見誤った」と言いたい。知覚主体は、たとえ知覚をやり損ねたとしても、何も見ていないのではなく、やり損なう以前に何かを見て知覚していたという気持ちになる。この気持ちを汲み取る。

仕切り直し、用語の定義から入ろう。小草氏の勧めに従って Fish（2010, p. 3-4.）を参考にする。ここでは知覚の代表的ケースとして、知覚することは視知覚することだとして議論をすすめる。

知覚（perception）：対象物が見られており、かつ、実際にあるとおりに見られている経験
錯覚（illusion）：対象物が見られており、かつ、不正確に、実際にあるとおりとは違って見られている経験。たとえば丸い物が楕円形であるように見えたり、青い物が緑色であるように見えたり、長い物が短く見えたりする経験
幻覚（hallucination）：何かあるものが見えているように思えるけれど、実際には何も見られてはいない経験。たとえば、マクベスが短剣を経験したり、ハムレットが父親を経験したのは、幻覚である。

15. そうは言っても、知覚の哲学の醍醐味は、知覚経験とは独立した実在との接触をどうしたら保証できるのか、そのような知覚観や知覚理論はどのようなものなのか、あるいは、知覚経験は実在との接触などやはりできないのか（もしくは、実在の意味を変更することでしか、リアルとの接触はできないのか）といった、認識論や懐疑論の問題を引き受けた上での、知覚経験の本性を考える点にあると思っている。たとえば私にとっては、大森荘蔵の『新視覚新論』や『物と心』は、上述した問題へのがっぷり四つの取り組みで、人を興奮させて知覚の哲学へと引っ張りこむ魅力にあふれた仕事だが、現在では、知覚の哲学へ誘引とはならないのだろうか。

知覚「的経験」（Fish は “visual experience” 視覚的経験としているが、小草氏の言葉である知覚「的経験」を用いる）：ある経験が知覚、錯覚、幻覚のどのカテゴリーに入るかとは無関係にその経験を指示する必要があるときに、知覚「的経験」という概念を使用する。知覚「的経験」は知覚、錯覚、幻覚の三つの経験を含む一般的用語として理解しなければならない。

細かい話になるが、知覚「的経験」は、さしあたり、知覚、錯覚、幻覚を無差別に指示する場合に用いられる使用上の概念・用語であって、三つの経験になり得るようなニュートラルな意味での経験が「ある」という存在論的な含意なく導入されていることには注意をしておいたほうがよいだろう。知覚「的経験」という概念が使用上導入されたからといって、それが、幻覚や錯覚や知覚を同一クラスに包括する上位概念であるとは限らない。私には「経験」という用語の方が無難だと思えるけれど、今は目をつぶろう。

４．３　誤りと失敗の意味を蒸発させる志向説、センスデータ説

染谷（2017a）第 8 章で論じたのは、知覚失敗、知覚をやり損なうという意味での見間違いや聞き間違いはあるけれども、誤りを達成しているという意味での知覚錯誤はない、ということであった。知覚錯誤のように思われる経験は、知覚達成か知覚失敗に分類できるか、もしくは、幻覚のように知覚とはそもそも異なる種類の経験であると論じることで、誤ることを達成する経験などないと論じたのである。

知覚は誤らないという主張だけが一人歩きしてしまった感もあるが、誤った知覚がやり損なった知覚だと解釈できれば、私の主張はゴールしている。そしてこの論点に対しては、小草氏は、半分は同意しているように思える。知覚が成功と達成を含意するということには反対しないからだ。

けれども半分は反対しているようにも思える。

まず、志向説に関する私の反論に対して、錯覚や幻覚は、知覚達成ではないけれど、知覚とは異なる意味での達成経験ではないかと主張する。「たとえば、志向説論者なら、錯覚や幻覚は、世界との接触という点では達成ではないが、主体が世界に関するある内容を抱くということ（そしてまた、それによって知覚的経験をもつということ）に関しては達成であると主張するであろう」と述べる。この論法はあり得る路線であるが、しかしながら、致命的な主張ともなる。錯覚や幻覚を、錯覚という達成経験、幻覚という達成経験だとするなら、錯覚や幻覚からは「錯誤」「誤り」「失敗」の意味が蒸発するからだ。

たとえば、知覚は失敗した場合には、実在しないものを知覚していたとはならない。知覚失敗は端的なしくじりであるのだから、実在をまだ知覚できていない。達成のための努力が課せられる。しかし、幻覚を達成だとすれば、「何かあるものが見えているように思えるけれど、実際には何も見られてはいない経験を達成している」こととなり、これは、知覚とは別種の経験をしているだけでしかない。同様に、錯覚は「対象物が見られているが、不正確に、実際にあるとおりとは違って見られている経験を達成している」ことであり、知覚とは別種の経験をしているだけである。つまり、幻覚も錯覚も達成であるとしても、それらが知覚とは異なる達成経験である限り、「誤り」の含みが消えてしまうのである。誤りでなければ正解もない。別種の経験である限り、知覚のなりそこないという意味は含意されない。小草氏はこれで OK と言うだろうか。

４．４　知覚の規範性

事実とは異なる世界のあり方を想像したり、まだ実現していない未来の状況を予想したりするとき、偽なる信念を私たちはもつ。しかし、想像や予想における信念は、偽の信念ではあるが「誤った」信念ではない。これと類比的に、私たちが幻覚や錯覚を経験しているとき、私たちは世界に関して事実とは異なる内容をもつ経験をしている。ただそれだけであり、「誤った」「失敗した」経験をしているわけではない。少なくとも、知覚とは異なる種類の経験を達成しただけでは、誤りや失敗がもつ知覚との隔たりを含意させることができないのである。

センスデータ説はもっとラディカルで、幻覚や錯覚から「誤り」「失敗」の意味を取り去るだけでなく、知覚から「真正」の意味をも取り去ってしまう。なぜなら、センスデータ説では、知覚であろうと錯覚であろうと幻覚であろうと、どの経験もセンスデータ経験（？）の達成へと還元してしまうからである。

まとめよう。小草氏の述べるように、志向説やセンスデータ説が、錯覚や幻覚もまた達成経験だと（ただし、世界との接触はないけれど）するとき、どうしてそれが知覚（的経験）の「誤り」なのか、あるいは失敗なのか、を説明しなければならない。そのような説明など必要ないということであれば、ここで頭を悩ませる問題はない。初めから知覚錯誤経験などないのだから。

不思議なことに、志向説やセンスデータ説において錯誤を容認しようと凝らした意匠（表象内容、センスデータ）は、逆に錯誤を蒸発させてしまう。もしも「誤り」や「失敗」という性格を幻覚や錯覚にもたせたいなら、「この場面でならこう見えるべきである」、「あの場面はこう見えてはいけない」という、知覚者が置かれた各環

境状況において普通の知覚者であれば当然成し遂げられるであろう模範経験（知覚）を設定し、それが達成されずに失敗していることを、幻覚や錯覚の説明の一部に含める必要がある。知覚には知覚の、その場の環境状況に応じて守られるべき規範があって、錯覚や幻覚はその規範からの逸脱経験であるがゆえに、「誤り」や「失敗」といった性格（「真正」と「成功」を含意する性格）を持つ、そうした論証が必要になのだ。知覚には規範性があることの論証もしくは説明は、志向説やセンスデータ説の道具立てからストレートに導き出せないのではないか。そしてそうだとすれば、知覚「的経験」の存在を確保したところで、「誤り」の可能性は示されたことにはならないだろう。

私は、知覚の規範性を、知覚の達成基準と必要タスクとして論じた（染谷, 2017a, 261-263）現代の分析系の知覚の哲学では、どの程度、こうした知覚の規範性が議論されているだろうか。さて、ここで、「エイムズの部屋」、「半分水に浸かった棒」、「ガラスにぶつかって死んだ人」を知覚達成だとする私の論述が、小草氏にとっては受け入れがたいと思われる理由が説明できる。知覚「的経験」の存在を私が認めないからではない。これらのケースはどれも知覚の規範性、知覚の達成基準と必要タスクを容易に定めることができないからだ。

これらどのケースでも、知覚の規範（「このように知覚されるべき・達成されるべき」）がはっきりしないものである。私は、あらためてそう思うようになった。書籍のなかでは、達成だと強引に押し切る野蛮さが際立ち、おそらくそうした論じ方が屁理屈に映じてしまったと思われる。この点を素直に認めたい。エイムズの部屋の事実を見た・知覚したと言えるには、エイムズの部屋はどう見られなければならないのだろうか。およそ人間離れした巨人が見える「べき」なんだろうか、ゆがんだ部屋のレイアウトが見える「べき」なんだろうか。エイムズの部屋の知覚規範は、人工的に仕掛けられたトリックのために、私たちの日常的な知覚の規範のようには「見えるべき」姿をうまく特定させてくれない。そしてだからこそ、巨人が見える場合も、ゆがんだ部屋に普通の人が立っている場合も、等しく知覚達成していると思いたくなる。エイムズの部屋という装置は、知覚達成の基準が安定しないように人工的に作られた装置なのである（そんな不安定さを、私は「けしからん」とは思わない。エイムズの部屋って楽しいじゃん）。

その他のケースもこれと類比的に考えることができる。半分水に浸かったまっすぐな棒の知覚達成の基準ってなんだろう。それはどう知覚されるべきなんだろう。まっすぐなんだから水に入れてもまっすぐに見えてまっすぐだと知覚されなければならないんだろうか。それとも水越しにまっすぐな棒を見ると、まっすぐだけど曲

がって見えなければならず曲がっていると知覚されなければならないんだろうか。理想的に透明で肉眼ではおよそその表面を見ることのできないガラスは、どう見るべき・知覚されるべきなんだろうか。ぶつかってしまうのだから、見えないのは知覚失敗なんだろうか。それとも肉眼では見えないのが知覚成功なんだろうか。手品を見ているとき、何を知覚するべきなんだろうか。ギミックの背後にあるトリックを見破ることができなければ知覚したことにならないんだろうか。空中に浮かぶ人体を知覚するべきなんだろうか。砂に埋められた電流発生装置を掘り当て、それに対して食餌行動をするサメは、何を知覚すべきだったのだろうか。食餌となるカレイではなく、人類の発明品を知覚すべきだったのだろうか。それとも人間による実験だということを察知して、電流発生装置を知覚すべきだったのだろうか（サメにとって酷だよね〜）。これらのケースはどれも知覚の規範、知覚の達成基準が、グラグラしている。

小草氏が、私の議論に強引さと屁理屈を感じたのは、知覚の規範の不安定さを考慮しないまま、知覚達成か失敗かに早急に分類しようとしていたからではないかと邪推する。もっとも、実際に志向説は、「誤り」の意味を、固有機能からの逸脱（葛谷氏の指摘）や、表象内容を消費して生存へ寄与する行動を生み出せるかどうか（消費説的説明）といった基準によって指定する（鈴木, 2015, 149-152）。幻覚や錯覚にもこうした説明を与えることはおそらく可能であるはずだ。しかしそれは、私が論じているような成功と失敗の規範に類したものを導入して、知覚とは異なる達成経験（錯覚、幻覚）に錯誤の意味を授けているだけである（たいへんな仕事だけど）。したがって、私の反省と後悔を含め、これまでの議論に納得できるのであれば、誤りや失敗を語るのに、知覚、錯覚、幻覚に共通するニュートラルな知覚「的経験」を持ち出す必要はない。知覚の規範に言及できれば、「誤り」や「失敗」について有意味に語ることができる。ニュートラルな知覚「的経験」があり得ないことは論証できていないが、そのような経験に頼らずとも「誤り」や「失敗」の意味は確保できることを示してみた。

４．５　幻覚の可能性

錯覚も幻覚も、錯覚であり幻覚であると同定されている限り、この事実を根拠に、幻覚や錯覚は知覚とは異なる種類の経験であると主張したい気持ちが一方にある。しかしながら、他方で、これらの経験が、知覚に失敗している経験とも考えたい気持ちもある。

もしも前者のように、錯覚や幻覚を知覚とは異なる独自の達成経験とするならば、どうして知覚には成功と失敗があるにもかかわらず、錯覚では「錯覚し損ねる」や幻覚では「幻覚し損ねる」という事態があるようには思われないのだろうか。想像に失敗したり予想に失敗することはありえても、錯覚失敗や幻覚失敗がどのような事態なのかを考えるのは難しい。もしも錯覚失敗や幻覚失敗がないのなら、錯覚や幻覚は、いまだ知覚にはなりきれていない未完成・未達成な知覚なのだろうか。

見間違いのような錯覚は、達成条件と必要タスクを示せる知覚失敗として処理できそうである。しかし、上で見たように、手品やエイムズの部屋の経験はすべて失敗と言い切ってしまうのもためらわれてきた。手品やエイムズの部屋では、トリッキーな知覚が達成されることがギミックや特殊な装置を用いることで目指されている。手品のタネやエイムズの部屋のカラクリすべてを見抜くまで、知覚は完了しないというのも強引な話である。イリュージョンを楽しめる経験ができていることをもってして、知覚は達成されたと考える余地もある。この点は、染谷（2017a）より譲歩してもよい。何が見えれば知覚が達成されるのか、何が見えなければ知覚は失敗となるのかは、つまり知覚の規範は、見られるべき対象がなんであるかにより（手品という出来事か、エイムズの部屋のスペクタクルかにより）変わるし、変わってよいと今では考えるようになった（本の中でもそのように論じているのだけれど cf. 染谷, 2017a, 311-317）。

幻覚の論じ方は錯覚とは異なる。私は、幻覚を知覚とは種類を異にする別の経験として論じた（染谷, 2017a, 272-278）。もちろん小草氏が指摘するように、問題にしている幻覚が幻覚経験の本性を検討する上で十分であるとは私も思っていない。幻覚経験をもつ人の現象学と生態学が不足しているのは自覚している。しかし、小草氏のあげるシャルルボネ症候群は、やはり知覚とは別種の経験であることは間違いないように思う。

シャルルボネ症候群経験の特異なところは、経験されるモダリティが一つに限定されていることである。すなわち、視覚経験においてだけ生じる現象であり、見えの上では知覚と寸分違わぬ経験が起こっているようなのだが、知覚と異なり、視覚モダリティに現れた幻覚対象は触覚モダリティには登場しない。知覚なら、見えた対象物には当然触わることもできる。シャルルボネ症候群では、どんなに詳細に見えても、それに触わることができない。また患者もこの経験が知覚ではないことに気づくことができる。単一モダリティのみに起こる経験であるという点でシャルルボネ症候群は興味深い新種の経験ではあるが、知覚ではないと考えてよいと思う。

それでも小草氏は、知覚と区別できない幻覚は可能であると論じることができ、かつ、そう論じることは十分価値あることだと主張する。この可能性を知覚経験の選言的性格から否定する選言説論者であっても、知覚と区別できない幻覚の可能性を哲学的に考察することの価値を認めている。私はそのような哲学的フィクションの価値を認めないけしからん奴なのかもしれない（きっとそうだ）。

私もここで、想像力を膨らませて知覚と区別のつかない幻覚をやれるところまで想像してみるとしよう。たしかに、統合失調症やその他の症例として提示される幻覚は、一つのモダリティ経験に限定されており、複数のモダリティにまたがって生じる幻覚は現実にはないのかもしれない。知覚との区別がつかず、幻覚であるとはわからないまま一定期間持続し、視覚だけでなく複数の感覚モダリティにまたがって生じる幻覚は、この現実世界の人間や生物ではあり得ないのかもしれない。しかしながら、それでも、そのような幻覚をもつことは、そして、そのような幻覚をもつ生物は思考可能である。この思考可能性が確保できれば、知覚と寸分違わぬ幻覚が思考可能であり、このような幻覚の可能性から、知覚経験の現象的性格の本性をつきとめるという知覚の哲学にとって重要な仕事を成し遂げることができる。なるほど説得されそうである。

しかし、このような議論には次のように反論したい。知覚と区別できない幻覚の可能性に訴えるときに持ち出されているのは、知覚と区別できない幻覚を思考可能にするような幻覚概念の可能性である。現にこれまで報告されている幻覚は、見えているように思えるけれど実際には何も見られてはいない経験であることが何らかの仕方で経験的に判明し、同定された経験である。しかし純粋な可能性に訴える議論はここから飛躍する。知覚経験との区別がつかず、知覚経験だとも幻覚経験だとも判明できない経験が可能であるということ、だから、対象物やその性質が世界の中になくとも、それらがあるときに成立する知覚経験と同じ特徴をもった経験がありえること、を主張するわけである。このような一種の想像変様は、目的とする幻覚が思考可能であるように、幻覚の意味内容を変え、同時に、知覚の可能性と意味をも現実の知覚から変えているのだ。小草氏はこの議論によって、知覚経験の（おそらく幻覚経験の）本性に迫れるとする。けれども、そうした成果が期待できるのは、そして実際に成果があるのは、「現象的性格」や「内容」や「意識的気づき」という道具立てとフレームで知覚経験の本性を分析する＜知覚の哲学＞だからこそなのである。そうではないフレームと道具立てで知覚経験や幻覚経験の本性に迫ろうとする《知覚の哲学》、たとえば認識と行動へのエコロジカル・アプローチからしてみれば、本性への接近どころか、本性からの遠ざかりに思えてくる。たとえば、こ

のような幻覚では、中間媒体・媒質も幻覚されることになるのだろう。そうすると、中間媒体は、知覚者の存在とは無関係に環境に成立する事実であるので、知覚の場合とそっくりな中間媒体は、幻覚者の存在と無関係に幻覚環境に成立する事象になるのだろうか？一体、私はここで何を思考しているのだろう？

かりに、このような幻覚が可能だとしても、そうした幻覚は、この世界で経験される幻覚と同種の経験であるかどうはかまったく明らかではないし、また、この世界でわたしたちの経験する幻覚について何かを明らかにしてくれるかどうかもわからない。さらに根本に戻って、このような幻覚をする生物が思考可能であるような世界が思考可能であるのかどうかも定かではない（可能世界が可能なのかってどういうこと？）。

結局、問題は振り出しにもどる。知覚と区別できない幻覚を思考可能にしてしまう、知覚、幻覚、錯覚という概念は適切な概念であるのかどうか。知覚、幻覚、錯覚の本性とは何かという問題だ。

５．それで・・・メタ知覚の哲学の視点

きつい言い方になる。＜知覚の哲学＞のコミュニティでだけで通用できる知覚経験の分析は、私にとっては哲学的にもあまり価値があるように思えない。最後に述べた知覚の哲学における幻覚経験の扱い、特にその思考可能性から繰り出される知覚経験の本性の分析から、知覚経験の本性が本当に明らかになるのだろうかと疑っている。こうした新世代への文句を言いはじめるのは、歳をとったからかもしれないが。

最初の節で言及した議論に戻ろう。中間媒体・媒質は、この地球上に生存する生物の感覚知覚経験とそれに基づく行動の本性を突きとめるために、不可欠な分析ツールである。知覚経験の本質と言ってもいい。そのように考えられるのは、エコロジカル・アプローチという立場に依拠して、知覚や行動を考えるからである。同様に、内容や現象的性格や意識的気づきが、知覚経験の本性と知覚経験全体の説明にとって不可欠な分析ツールとする＜知覚の哲学＞の立場では、エコロジカル・アプローチの目的や意図、さらには媒質の重要性は理解できないかもしれない。小草氏が最後に指摘しているように、何を課題としているかが共有されていなければ、エコロジカルコミュニティと＜知覚の哲学＞コミュニティは、同じ土俵で議論することもできない。

今回、この合評シンポジウムを通して、そしてその後に呈せられた小草氏、葛谷氏の論考を見る限り、知覚経験の本性を突きとめ知覚経験の全体的説明を与えるという課題は、共有できているという感触は持った。逆に、その課題を遂行するにあたって、着眼点がまるで異なることも理解できた。乗り越えなければならない課題、正念場はここからである。知覚の哲学は、「メタ知覚の哲学」の視点を持って哲学的考察を続けることができるか、すなわち、自ら用いている分析ツールが、知覚経験を生け捕りするのに十分機能しているのかどうかを点検できるかどうか—この点が肝要だ。

情報ピックアップとは何か、それができるための主体の条件として何が要請されるのか、私に出された疑問は、自家薬籠中の物だと思っていた分析ツールであってもきちんと説明点検せねばならない点があることを自覚する機会となった。同時に、私も疑問を呈しておいた。意識的気づきは、現出と現出者の両方に分配されてはなぜいないのか、情報は生物のシステムが運ぶのではなくて媒質中のエネルギー構造が運ぶと考えてはなぜいけないのか。そして、中間媒体・媒質のような、モノでも知覚者でもないようなその間にある存在に、知覚的に世界を知る秘訣が隠されている感触を持てないか。双方の哲学コミュニティは、自身のコミュニティ内部にいては見えないことを見つけ出して、それについて思考をめぐらせなければならない。それが、新しいアイディアを立ち上げるために求められることだと思う。

メタ知覚の哲学の視点を意識させてくれたと同時に、エコロジカル・アプローチの立ち位置をメタ知覚の哲学の視点から俯瞰するワークの必要性を突きつけてきた、シンポジウムの登壇者である小草氏と葛谷氏にあらためて感謝申し上げる。仕事が増えちまったよ。

文献

Aristotle. (2014)「魂について」中畑正志（訳）『アリストテレス全集 第 7 巻』岩波書店.

Fish, W. (2010) *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*, NY.: Routledge. 山田圭一（監訳）源河亨・國領佳樹・新川拓哉（訳）『知覚の哲学入門』2014, 勁草書房.

Fodor, J. and Pylyshyn, Z. W. (1981) “How direct is visual perception?: Some reflections on Gibson’s ‘Ecological Approach’,” *Cognition* 9, 139-196.

Heft, H. (2001) *Ecological Psychology in Context: James Gibson, Roger Baker, and the Legacy of William James's Radical Empiricism*, New Jersey: Laurence Erlbaum Associates, Press.

Gibson, J. J. (1966/1983) *The Senses Considered as Perceptual Systems*, Westport, Connecticut: Greenwood Press. 佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之（監訳）『生態学的知覚システム—感性をとらえなおす』2011, 東京大学出版会.

Gibson, J. J. (1979/1986) *The Ecological Approach to Visual Perception*, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬晃（訳）『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』1985, サイエンス社.

Heider, F. (1926/1959) "Thing and Medium," *On perception and event structure, and the psychological environment, Psychological Issues*, 1, Monograph 3, 1-34.

Heider, F. (1988)『ある心理学者の生涯』堀端孝治（訳）協同出版.

野中哲士 (2016)『具体の知能』金子書房.

Meinong, A. (1906) "Über die Erfahrungsgrundlagen unseres Wissens," in *Abhandlungen zur Didaktik und Philosophie der Naturwissenschaften*, Band I, Heft 6, Berlin: J. Springer. Reprinted in *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, Vol. V: 367–481. 1968–78, Graz: Akademische Druck und Verlagsanstalt.

Merleau-Ponty, M. (1964)『行動の構造』滝浦静雄・木田元（訳）みすず書房.

Reed, E. S.　(2000)『魂から心へ—心理学の誕生』村田純一・鈴木貴之・染谷昌義（訳）勁草書房.

柴田崇 (2012)「ハイダーとギブソンのメディウム概念」『生態心理学研究』vol.5-1, 15-28.

Shields, C. (2016) *Aristotle's* De Anima, *Clarendon Aristotle Series*, Oxford: Clarendon Press.

染谷昌義 (2017a)『知覚経験の生態学—哲学へのエコロジカル・アプローチ』勁草書房.

染谷昌義 (2017b)「アフォーダンスとオシツオサレツ表象」信原幸弘（編）『ワードマップ心の哲学』新曜社, 220-227.

染谷昌義・細田直哉・野中哲士・佐々木正人 (印刷中)『身体とアフォーダンス—ギブソン『生態学的知覚システム』から読み解く』金子書房.

鈴木貴之 (2015)『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろう—意識のハードプロブレムに挑む』勁草書房.